教育研究所ニュースレター
NEZASU

No. 1 1991. 11

発行 神奈川県高等学校教育会館
教育研究所
〒220 横浜市西区藤棚町2-197
TEL 045(231)2546

歴史、ひとつの断面

教育研究所代表 小 山 文 雄

明治時代に入りこみ、長い時間をかけてきて、そろそろそこから抜け出したいと思うのだが、なかなか出口が見つからない。見つかったとしてもそれがそのまま現代の入口というほど歴史は単純でないだろうが、せめて現代の胎動として近代にはひきもどされないものを措定したい。それが今の願いである。

日本の近代は明治維新によって大きな跳躍を試みた。そして明治二十年にはすでに「維新」には引きもどされないという輝かしい宣言が生れた。徳富蘇峰の「新日本之青年」である。

「若シ社会ノ年令ハ。其ノ文明ノ辺(ほとり)ニ向テ回転スル毎ニ増加スルモノトセバ。我ガ明治ノ青年ハ。却テ天保ノ老翁ヨリモ先進ト云ハザル可ラズ。故ニ明治ノ青年ハ天保ノ老人ヨリ導カルヽモノニアラズシテ。天保ノ老人ヲ導クモノナリ」と「明治ノ青年」を歌いあげる蘇峰は、文明社会である「誠実重厚ナル純白ノ平民社会」への指揮をとる者と自ら規定した。

蘇峰は維新時の年令三歳である。まさにこの時明治の青年の先頭にあった。この書に序を寄せた肥塚龍は十五歳の年長で天保生れに近かったが、その経てきた歴史から、「維新革命ノ日本ハ慷慨悲憤ノ日本ナリ明治二十年ノ日本ハ風流艶態ノ日本ナリ」と、時代の変貌を伝えている。

明治時代とひと口に言ってもここにひとつの明瞭な転換が示されているわけだが、といって蘇峰に現代の胎動をみることは到底できない。

だが二十年間という区切りに目をとめて、もうひとつそれを重ねて、明治四十一年（1908年）の戊申詔書に思い至った時、ふと心動くものがあった。むろん詔書が胎動ではない。それが現実にはほとんど効果をもたなかったというそのことに思いが止ったのである。

日本近代の輝く合言葉は文明であった。それは普遍としての近代に重ねられ賛美された。しかし近代は西洋、近代化は西洋化でしかなく、そこに深い影がおちた時、人々は文明に「物質」を冠しておとしめはじめた。明治三十年代の半ばからは、文明は「物質文明」としか呼ばれなくなった。しかし、文明化が日一日と進むなかで暮しながらの文明批判にどれほどの力があっただろうか。その悲哀は、日露戦争（1904～5年）を経ることによって、幻滅に変り、呪詛ともなった。国に勝利はあっても国民に繁栄

はなかった。講和反対国民大会と焼打騒擾は、国民のせめてもの意志表示であった。

そうした背景もあって、いっそ影の中に人間をひたしていこうとする方向で自然主義がたちまちに人々の心をとらえた。それは単に文学運動としてだけでなく、世道人心をゆるがす社会問題ともなった。その一方、文明の影の部分をあくまで掘りおこして、そこに光をあてようとする社会主義も一気にひろまった。これらは支配層にとってきわめて憂慮すべき出来事であった。対策は個々の事象には及ぶものの荒む人心に有効なものはありえない。内務大臣平田東助は天皇に泣きつくようにして伝家の宝刀ともいえる「詔」の発布をはかった。それが戊申詔書である。

そこで国民に示された諭しは、「醇厚俗ヲ成シ」（人情厚く軽薄でないように）、「華ヲ去り実ニ就キ」（虚飾や贅沢を避け質実に）、「荒怠相誡メ」（心のおもむくままに事に耽ったり怠ったりすることのないように）、「自疆息マザルベシ」（ひたすら務めよ励めよ）であった。

この詔は「華ヲ去リ実ニ就キ」や「自疆息マザルベシ」が一時のはやり言葉となっただけで、ほとんど実効なく終った。少くとも支配層が狙った「教育勅語」の二の矢は外れたといってよい。大正生れの人々でさえ、おそらく戊申詔書を知る者は多くないだろう。その詔は一時限りのものだったのである。現実生活の重さにとって詔の重みがどれほどでもないということは、新しい時代への予感となる。

ちなみに、明治時代の詔と比べるほどのものではないが、1965年に佐藤栄作内閣のもとで、鳴りもの入りで作られた「期待される人間像」が、全く不毛であったことを思い出したのでつけ加えておく。この時も「期待される〇〇像」の言葉遊びが一時はやっただけである。

政治家は道徳を説く任にない。政治的ということがいかに庶民の道徳から遠ざかっているものかは周知である。もし説くのなら政治家自身に向かって説け、というのが、昔も今も変らぬ庶民の思いである。

詔書発布の二カ月後に「パンの会」が旗上げしたのは皮肉なことでもあった。帝国大学医学部の学生だった木下杢太郎は北原白秋、吉井勇、石川啄木ら「明星」の同人だった詩人たち、画家の石井柏亭、山本鼎、森田恒友を誘って、文学と美術の交流の会をはじめた。これがパンの会である。パンはもちろん牧羊神のことである。

「千九百十年は我々の最も得意の時代であった。『パンの会』は毎週開かれた。我々はRodin（ロダン）の銅像の首の脣に寄せた皺（ねばと）の粘（なさけ）さが何う云ふ情を蔵くしてゐるかが分るほどになった。また亜刺比亜（アラビア）物語や、近松（門左衛門）、三馬（式亭）などに出て来る青年の心に同情を寄するほどの苦労も覚えた頃である」（カッコ内は注）杢太郎はのちの第一詩集『食後の唄』（大正八年刊）にそう記し、ついで「あのいかにも下町の老人らしい歌沢龍美太夫の口から出るいなせな『一こゑ』の中の『女ごころはさうぢゃない』の「ぢゃ」の発音の蔵する神秘不可思議にして百年の痴情をにじましたる蘊蓄を驚嘆」することについて語っている。この耽溺の世界は、かの戊申詔書とまさに対極をなす。それ故に、近代にひきもどされないなにかを残す。

杢太郎らは、日本橋に開店した鴻の巣という、東京最初といってもよいCafeにたむろするようになった。若い亭主が西洋の酒とグラスについて教えてくれた時のことを、つぎのように書き記した。亭主は西洋にも渡り、世間も広く、道楽気もある気さくな男であった。

「如何にCuraçao（きゅらさお）の精神を快活にし、如何にGin（じん）の人の心を激怒せしむるかを教へた上に、(中略)小さいのは該里（しえりい）ので、これは赤葡萄杯（れっどわいんぐらす）、これは白葡萄杯（はくわいとわいんぐらす）と、一つ一つ手に挙げて、無足杯（たんぶらあ）、鶏尾杯（てくてるぐらす）、璃球児杯（りけえるぐらす）の数々を示説した。それは冬の夜のことで、華奢な火爐（すとおぶ）には緑色のえなめるの花が光り、外は外として東京の河岸らしい響のする中に、昔の浦里時次郎を物語る夜楽（やがく）の通らうといふ時であった。」

浦里時次郎は新内「明烏夢泡雪（あけがらすゆめのあわゆき）」の主人公である。キュラソオの盃を傾けながら、新内流しにふと心をひかれる青年たち、そこに新時代の横顔がひとつゆらめいてみえる。「無足杯」と、また「鶏尾杯」と、西洋語の日本語への写しかえをみるとき、つくづくとグラスを見つめる目と、表現への若い意欲を感じる。彼等は文学の徒なのである。杢太郎は即興でひとつの詩を得た。

該里酒（しえりい）
冬の夜の暖炉（ストアブ）の

湯のたぎる静けさ。
ぽつと、やゝ顔に出たるほてりの
幻覚か、空耳かしら、
該里玻璃杯(セリイグラス)のまだ残る酒を見いれば、
ほのかにも人の声する、
ほのかにも人すすり泣く。
「え、え、ま、あ、な、に、ご、と、ぞ、い、な……あ……」と
さう云ふは呂昇(ろしょう)の声か。
この春聴いた――京都の寄席の、
それをききて人の泣いたる――。
乃至その酒のしわざか。　――以下略――

ここにあるのは、「西域文明の教養と官感とを修練し来った」（白秋）青年たちの、美への耽溺である。欧化への傾きと江戸情調との間を行きつ戻りつする陶酔である。たわいないといえばたわいない感覚の飛散で、社会の現実にどう関わろうとするものでもない。しかし、当時に「近代」日本として正当づけようとしていたものへの反逆を結果している。

1909年にフランスから帰国したばかりの高村光太郎は、パンの会について「青春の爆発といふものは見さかひのないものだ」と言い、そこで内に目ざめた「本当の青春の無鉄砲」が、「時代的に或る契合点を持ってゐた」と回想している。ここには、近代日本の影の部分を一挙に飛びこえてしまおうとする「青春」と「時代」認識とが本能的に結びついていたことが示されている。杢太郎がのちにパンの会を「或る執着を有する過去」とするのもまたその故であろう。

ところで、杢太郎が「最も得意の時代」という1910年に、ある雑誌が「吾等青年の行くべき道」という特集を組んだ。それに寄稿した二十歳代は、杢太郎らより数歳年長の相馬御風、小山内薫、阿部次郎、白柳秀湖、森田草平といった面々である。そしてそこには、「一つの理想に熱中し全身全我を捧げて、他を顧みない生活」と、すべての理想を放棄して「所謂レシグネーション（諦観）の境涯」との間に揺れる青年像が示されていた。白柳は「青年は先づ温い心を以て社会の波に没頭する」ことを思い、阿部は青年相協力して「後に来る者の為に荊棘(けいきょく)を拓く」ことを夢想して前者に傾き、相馬は「藪蔭(きのこ)の菌のやうな沈黙の生活」と言い、小山内は「幻滅」であるが故に一刻も休みたくない、一時も眠りたくないと、絶えず動いている「生活の長夜の宴」を願って後者に近づく。

彼等の状態を解説的に言えば、「あらゆるものに対する否定的態度と、如何に否定しても『自分が活きて居る』と云ふ事実だけは否定の出来ない事と、それから日一日と理屈が解らなくなり情味がなくなって行く代りに神経だけが益々鋭敏になり愈尖(いよいよ)って行くと云ふ事」の交錯であった。そしてそこに貫通するキーワードは「真摯」と「僕自身」であった。「汝の性に従ふ外汝の道なし」であり、「凡ての大なる事業は只孤独の裡に於てのみ成される」である。

ここまで辿ってきて、「個性」の二文字がほの見えてきた。しかし、それが青春の「爆発」としてあるいは青春への「沈潜」として、近代の指標のひとつ「国家有用の人」をつきぬけていく姿をどこに捉えるか、「個性」としての「国家」への対峙をどう跡づけるか、それはなお幽闇のうちにある。

最後に1910年の出来事のいくつかを摘録しておこう。

四　月　雑誌「白樺」が創刊される。
五　月　雑誌「三田文学」が創刊される。ハレー彗星が出現する。
六　月　いわゆる大逆事件で幸徳秋水が逮捕される。
八　月　韓国併合に関する日韓条約が調印される。石川啄木が「時代閉塞の現状」を執筆する。
九　月　雑誌「第二次新思潮」が創刊される。
十二月　徳川好敏大尉が高度七十メートルで三キロメートルの飛行に成功する。

（こやま　ふみお　教育研究所代表）

『ニュースレターNEZASU』の発刊について

教育研究所の活動は、1991年度で３期６年目を迎えます。今年度はすでに、４月に『ねざす』第７号を刊行し、７月には『白書91』、ついで10月には『ねざす』第８号を刊行してきました。今年度は従来の刊行物だけでは日常的な活動が教師や父母の方々には分かりにくいため、機関紙『ねざす』と『白書』の合間を埋める形で年４回程度所報を刊行することを活動計画に盛り込んで準備をしてきました。

名称は『ニュースレターNEZASU』として今後研究協力員の方々に執筆をお願いして、その時々の教育課題に関する論説や教育関連の話題を寄せていただくとともに、教育研究所の活動をお知らせし、教育に関する情報を提供していくことになりました。研究協力員は、海老原治善（東海大学教授・日教組教育総研所長）、中島三千男（神奈川大学助教授）、菅龍一（和光大学講師・神教組教育相談委員）の３名の方々にお願いすることになりました。

今後、この『ニュースレターNEZASU』についてご意見・ご要望がありましたら、当研究所までお寄せ下さい。

シンポジウム「展望・開かれた学校」開催される

教育研究所の主催するシンポジウムを、10月19日(土)に高校教育会館（横浜市西区藤棚町）で開催しました。テーマは当研究所が追求してきたものの一つで、父母や子どもたちに「開かれた」高校のあり方をどう考えたらよいのかということでした。４名の先生方をお招きしてご意見を伺うとともに、父母・県民の方々にも参加していただいて高校への要望を述べていただきました。

このシンポジウムの内容は、来年４月に刊行予定の『ねざす』第９号に詳しく掲載する予定ですので、ここでは簡単にご報告致します。パネリストの先生は、海老原治善氏、小沢牧子氏、今橋盛勝氏、菅龍一氏の４名で、会場には20名の父母と60名の教師がお集まり下さいました。主催者として満足できる内容のものとなりました。参加された市民運動の方からは、「これだけ多くの先生が集まる場面は私たちの開く集会ではなかなか難しい。今日は来てよかった。」との感想をいただきました。

海老原氏は「先生も地域の勉強をして欲しい。」と語られ、小沢氏は「開かれた学校の原点は、私たちが子どもに強いている大人の『学校』意識を変えるところから始まる。」と述べられました。次いで、今橋氏は「父母の教育権の領域をもっと明らかにする必要がある。」と訴えられ、菅氏は「不登校の生徒が行きやすい学校づくりを考えた。」という自らの体験を語られました。会場からも制限時間ぎりぎりまでたくさんの意見が出されました。私たちも「開かれた研究所」を目指して、父母と教師がもっと語り合える場をつくるために様々な企画を実施して行きたいと考えています。

日教組・教育総研の活動本格化する

昨年６月に日教組定期大会で、従来の国民教育研究所を国民教育文化総合研究所に改組することが決まり、今年の６月に始動することになった。８月には、教育総研主催の全国の組合立の研究所の交流会が石川県山城温泉で開催された。また、10月には第１回教育文化フォーラムが日本教育会館（東京）で開かれた。所長の海老原治善氏の挨拶の後「日本の教育改革のいま」と題するパネルディスカッションが行われ、教育総研研究会議議長の日高六郎氏の講演が行われた。